

第一液 硝酸銀	5 g
アンモニア水(局方)	適宜
蒸餾水	100 cc

最初30cc位の蒸餾水に硝酸銀を溶かし、絶えず攪拌し乍ら之にアンモニア水を滴下すれば、初めは褐色の沈澱を生ずるが、尚續けて滴下する時は沈澱物は溶けて了ふから、それを限度にアンモニア水の滴下を中止し、次に残の蒸餾水全部を之に加へ、褐色又は黒色の着色塗に詰める。之が第一液である。

第二液(色留剤)	
ピロガロール	1.5 g
アルコール	5 cc
蒸餾水	95 ▲

染毛に當つては前述せる注意のもとに、最初第二液を萬遍なく塗布し、それが稍乾燥した時別の新しい歯刷子を以て第一液を塗布すれば、直ちに化學變化が起つて毛髪は次第に黒色に染められる。

上例は黒色染毛剤の處方であるが、褐色に染める場合は第二液のピロガロールを約半量に減じ、第一液の硝酸銀を $\frac{1}{2}$ 乃至 $\frac{1}{4}$ に減量する。尚萬一過つて薬液が地肌に附着し染色した場合は次亞硫酸ソーダ溶液で拭けば取れる。

處方例2. 一塗式銀性染毛剤

硝酸銀	1 g
アンモニア水	10 cc
豚脂	3 g
蒸餾水	70 cc

先づ豚脂を熔融して之にアンモニア水を加へ、よく振盪して乳化せしめる。次に硝酸銀を蒸餾水に溶かして其の乳化液に加へ暫く攪拌を續け、

斯くして出來た混合液を歯刷子にて毛髪に塗布し、それをバラバラにして太陽の直射光線に曝らして置けば、次第に黒色に變化して来る。

銅、鉛、水銀、ニッケル等の染毛剤はいづれも多少毒性があるのでこゝでは省略し、次に全く無害の蒼鉛染毛剤に移る。蒼鉛の染毛剤は其の染毛作用が極めて緩慢であつて又光線に當ると分解し易いから、特に黒の着色塗に入れ、堅く栓をして冷暗所に置かねばならぬ。蒼鉛の染毛剤は毛髪を褐色又は栗色に染める場合に用ひられる。

處方例3. 一塗式蒼鉛性染毛剤

次硝酸蒼鉛	3 g
10%炭酸カリ液	
枸橼酸濃厚溶液	} 共に適宜
グリセリン	30 cc
蒸餾水	50 ▲

次硝酸蒼鉛とグリセリンを乳鉢に入れ乳棒にてよく混合し、次に之を温め攪拌し乍ら炭酸カリの溶液を少しづゝ滴下し、次硝酸蒼鉛が完全に溶ける迄遅加して行く。それから之に枸橼酸の濃厚溶液を混合液が微かにアルカリ性を呈するまで加へて中和し、最後に蒸餾水を加へ黒色の塗に詰めて保存する。染毛の方法は銀性染毛剤と同様に洗髪後歯刷子と櫛とを用ひて塗布染毛するのである。

鐵性染毛剤は毒性がないので多少使用されるが、銀性或は蒼鉛性のものに比して満足な結果は得られない。

處方例4. 二塗式鐵性黒色染毛剤

第一液	硫酸鐵	0.1 g
	グリセリン	3 cc
	蒸餾水	75 ▲
	タンニン酸	0.5 g

第二液	没食子酸	0.5 g
	蒸餾水	80 cc

此の染毛剤の使用法は先づ第一液を毎日一回三日間充分に塗布し、次に第二液を歯の細い櫛につけて地肌に附かぬやう注意し乍らよく毛髪を梳く。而して其の次から毎日一回第一液と第二液を一、二時間の間を置いて交々塗布し、毛髪が黒色に染まる迄此の操作を連續的に繰りかへすのである。

2) 植物性の染毛剤

植物性の染毛剤は前述したものゝ外我國では又桑の根、しょうがの皮を胡麻油で煮詰めたものも用ひたやうである。

くるみの殻の染毛剤は其の殻の中に含まれてゐる染毛作用を有する成分を油に加へ、髪油として毎日用ゆる事によつて次第に染毛するのである。

處方例 1. くるみの染毛剤

流動パラフィン	60 cc
明礬粉末	12 g
乾燥したくるみの殻	20 △
アルコール	適宜
香 料	△

くるみの殻をアルコールに浸漬し、之に明礬とパラフィン油を加へて一時間程加熱し、次に之を濾過し香料を加へ髪油として不斷使用する。流動パラフィンの代りに植物油を用ひてもよろしい。

南亞細亞に産するヘンナの葉は昔から東洋婦人の染毛剤或は染爪剤として用ひられてゐるものである。其の使用法の一例はヘンナの葉と水を1と7の割合に混合して煮詰めたる液を、豫め洗滌せる毛髪に塗布するのである。但しヘンナの葉には或ゴム質のものが含まれてゐて同時に液中に浸出する。之が毛髪に不愉快な臭氣を與へる。それで煮詰めた液にアルコール

を20%位加へればゴム質は沈澱するから、此の濾過液を使用するのである。又ヘンナの葉を稀釋したアルコールに浸し、其の浸出する液を塗布してもよく、或は此の葉を粉末にして使用する場合もある。それは此の粉末を水で練つて糊状にしたもの毛髪に萬遍なく塗布し、一夜其のまゝ放置し翌日洗ひ落すのである。ヘンナの葉の染毛剤は全く無害ではあるが、然し地肌に對して多量に附ける事は注意した方がよい。ヘンナにレング(Reng)と云ふ藍科植物の葉を加へた染毛剤もある。其の混合の割合を變へる事によつて染色が色々に變化するが、レングが多ければ多い程色調は黒くなる。

3) 合成染毛剤

我が國で最も普通に用ひられる染毛剤は合成染毛剤である。此の合成染毛剤の原料は寫眞の現像液用薬品と略同様なもので、主にアニリン系統の化合物例へばメトール、デアミドフェノール或はパラフェニーレンジアミンなど之である。之等は酸化すれば水に不溶解性の黒色物質に變化する性質を有してゐる。然し乍ら酸化の進行中に出來る物質が皮膚を刺戟し、人によつては湿疹其の他類似の皮膚疾患の原因となるので、別して此の染毛剤を塗布する時は地肌につかぬ様特に充分注意する必要がある。

處方例 1.

第一液	パラフェニーレンジアミン	2 g
	炭酸ソーダ	2 △
	水	100 cc
第二液	過酸化水素水	3 △
	水	100 △

毛髪をよく洗滌し、先づ第一液を地肌につかぬ様に注意して根元から塗布し、液が稍乾燥した時第二液を同様に塗布すれば、此の兩液が化合して

化學變化を起し染毛するのであるが、充分染毛した時石鹼或はシャンプー等にて再び之を洗滌するのである。

處方例 2.

メ ト ー ル	1.0 g
鹽酸アミドフェノール	0.3 △
モノアミドフェニールアミン	0.6 △
亞硫酸ソーダ	0.5 △
稀アルコール	100 cc

先づ亞硫酸ソーダをアルコールに溶かし、次に他の原料を溶かす。充分に洗滌水洗した毛髪が乾燥した時、適量の液を容器に取り、同量の過酸化水素水(3%)を加へ、之を歯の細かい櫛で毛髪に塗布する。二、三時間後に毛髪は黒褐色に染色される。此の操作を二、三回繰返せば遂に漆黒となる。

合成染毛剤は皮膚を冒し易いから注意を要する事は前に述べた通りであるが、何れも液體であるから塗布した染毛剤が毛髪にそうて流れ易く、且つそれが地肌につかぬ様に染毛液中に豫めゴム質又はゼラチン質の溶液或は卵白などを混合し、粘稠性にして置く事も一つの便法である。

以上述べた染毛剤は主として毛髪を黒色に染毛する種類のものであるが、歐米婦人は更に所謂ブロンドに染毛する場合もある。其の方法は主に過酸化水素水を用ひて毛髪を漂白するだけであつて、彼地婦人の毛髪の性質によること勿論であるが、寧ろ染色に非ずして脱色と云ふべきであらう。即ち洗滌後毛髪が乾き始めた頃、過酸化水素水を海綿或は適當な刷毛で毛髪に塗布し、櫛でよく梳き毛髪をバラバラにして置けば、毛髪は次第に漂白されて金髪となる。若し一回の漂白で充分に金髪とならぬ時は一日一回數日間連續して之を行ふのである。

VI. 脱毛剤 Hair remover or Depilatory

脱毛剤は主にナトリウム、カリウムの如きアルカリ金属或はカルシウム、バリウム、ストロンチウムの如きアルカリ土類金属の硫化物が使用される。従来は之等の原料を粉末にして使用の際水で練つてクリームの状態にせるものを皮膚に薄く塗布し、數分の後水洗ひして脱毛する方法が行はれたが、今日では既にクリーム状に練つたものが販賣されてゐる。之等の硫化物は水との反応によつて硫化水素を生ずるから、何れも不愉快な臭氣を發する。

脱毛剤を長く皮膚に塗布して置く時は、皮膚が侵される恐れがあるから注意せねばならぬ。之を洗ひ落した後も肌が荒れぬやうに必ずコールドクリームの如き脂肪性クリームを塗布する等の手當を怠つてはならぬ。又脱毛すべき毛髪が長い時は豫め短く刈込み、其の上で脱毛剤を塗布すべきである。

處方例 1. 粉末状の脱毛剤

硫化カルシウム、硫化バリウム、或は硫化ストロンチウム	20 g
亞 鉛 華	10 △
澱 粉	10 △

總ての原料は微細な粉末にして混合し、壇に詰めて密栓し、日光を避け冷暗所に保存しなければならぬ。使用の際は此の混合粉末の茶匙一杯を茶匙三杯程の水で練り、脱毛する部分へ銅貨の厚さ位にそれを塗布し、五分乃至十分位経過した時紙切り小刀などの如き先の鈍い器具で脱毛剤を剥がし去り、次に皮膚面をよく水洗してコールドクリームを塗布して置く。

處方例 2. クリーム状の脱毛剤

前に挙げた各種の脱毛薬品に亞鉛華、澱粉などを配合し、クリセリン若くは水

にて練つたものであるが、粉末状のものと異り薬品が分解して効力を失ふ虞れがあるから、永く保存するに堪えない憾がある。

硫化バリウム	10 g
亞鉛華	10 g
澱粉	10 g
グリセリン	30 cc

グリセリンに澱粉を加へ攪拌し乍ら 120°C 位に熱すれば糊状のものとなる。之に硫化バリウム及亞鉛華を加へてよく捏練し、壺或は錫製のチューブ等に詰める。

第三章 口中に用ゆる香粧品

口は人體を養ふ栄養分を取り入れる關門であり、歯牙はそれを咀嚼して消化に資する道具である。而して歯牙の強弱は咀嚼の完全か否かにかゝり、従つて又消化の難易に重大な影響を及ぼすものである。

歯牙の表面は堅固な琺瑯質に蓋はれてゐて極めて丈夫なものである。然るに攝取した食物の残渣がある場合、口中に存在する乳酸菌が作用して醣酵を起し、之によつて生成した乳酸が歯牙の琺瑯質に作用して次第に之を腐蝕して齲齒となし、遂には歯痛を起し咀嚼力に重大な缺陷を生ずるに至るのである。従つて口中の衛生として我々は先づ第一に歯牙の表面、間隙或は歯齦等口中全部に亘つて食物の残渣を留めぬ様に常に清掃する事が必要である。而して齲齒の原因となる乳酸の作用を完全に防止する方法を講ずる必要もある。更に又出來得可くんば口中に存在する乳酸菌を撲滅する爲屢々消毒剤で含嗽する事である。

歯牙は斯く萬全を期して日常清掃せねばならぬ事は勿論であるが、又其の表面を絶えず皓々と輝かしてゐる事は最上の身だしなみの一つである。殊に婦人の皓齒は明眸と並行する美の第一條件として大切な事である。

又人によつては胃腸の障礙其の他の理由で氣息が甚だしく臭い場合がある。斯くの如き人に對して接するは非常に不快を感じるものであるから、斯かる場合は適當な手當を施さねばならぬ。

口中に用ゆる香粧品は如上の目的に添うて工夫された必須品であつて、歯磨、含嗽剤及香錠が其の主な種類である。

I. 歯磨類 Dentifrice

歯磨には粉歯磨、練歯磨、水歯磨の3種がある。

1) 粉歯磨 Tooth powder or Dental powder

粉歯磨は歯牙の表面を清掃するもの、乳酸を中和するもの、乳酸菌を撲滅する殺菌剤、甘味料、香味料及色素等から成立して居る。

歯牙の表面を磨き若くは清掃するものとしては沈降炭酸石灰或は軽質炭酸石灰が主として使用される。之は粉歯磨の大部分を占める原料である。沈降炭酸石灰は多少結晶性であるから珊瑚質にザラザラした觸感を與へるので、其の代用に軽質炭酸石灰が選ばれる事もある。從來鳥賊の骨の粉末、輕石粉末なども清掃原料として用ひられたが、今日は殆んど使用されぬ。此の他清掃用原料としては炭酸マグネシウム、珪藻土、カオリン、乳糖、オリス根末などがある。炭酸マグネシウムは清掃用の外粉歯磨の容量を多くする爲めにも用ひられる。珪藻土、カオリンは安價な爲時には炭酸石灰の代用となる事もある。乳糖は多少甘味があつて清掃の作用も有ち、オリス根末は清掃成分があり、粉歯磨に屢々使用される有効な原料であつて、其の爽快な味は炭酸石灰或は石鹼分の味を消し、若しくは減ずるに役立つものである。

乳酸を中和するものとしては石鹼、重炭酸ソーダ、硼砂などが選ばれる。石鹼は水に溶ければアルカリ性となり乳酸を中和するのみならず、歯ブラシにて歯牙の表面を摩擦して清掃と同時に泡を生じ口腔内に擴がる。此の作用は殺菌剤其の他の薬剤を十分に深部迄行き亘らせる効果を有してゐる。従つて石鹼は粉歯磨の原料として必ず多少使用されるのである。重炭酸曹達は極く少量用ひられる事がある。之は緩和なアルカリ性で、乳酸を中和し、歯石の沈着を防止する作用はあるが、別して爽快な味でないから、必ずしも使用されるものとは限らない。炭酸石灰及炭酸マグネシウムも亦乳酸に合へばそれ自身分解して酸を中和する性質を有してゐる。硼砂も重炭酸ソーダと同様な意味で使用される事もあり、其の味は不愉快なものである。

ものではない。

口中の消毒及殺菌の意味で硼酸、石炭酸、サルチール酸などの酸或はザロール、チモール、樟腦などが使用される。又香味料の薄荷脳、有加里油及其の他の香料は殺菌剤としても効力を有するものである。

甘味料は白糖又はサツカリンが普通に使用されるが、白糖は歯牙の間に残ると醸酵する虞れがある。サツカリンの甘味は爽快とは云へないが、殺菌性も多少あるので0.1%程度に使用され、乳糖も甘味料として多少使用されて居る。

香味料は冬綠油、薄荷油、桂皮油、小茴香油、レモン油、オレンヂ油、丁香油、サツサフラン油、ローズ油、有加里油の外に薄荷脳、樟腦、オリス根末、没薬などの香料が用ひられる。之等は總て風味を増加する所謂香味料として用ひられるが、中にも冬綠油、薄荷油、桂皮油は最も人々に喜ばれる香味料で、其の使用後口中を刺戟し清涼爽快の感を與へる役もするのである。

今日では殆んど使用されて居らぬが、炭は臭氣止になるので曾つて粉歯磨の中に其の粉末を混入した事がある。タンニン或はタンニンを含んでゐる物質は歯齦を強壯にするものとして微量用ひられる事がある。

近來粉歯磨の最も新しい成分として使用中酸素を發生する物質、例へば過硼酸ソーダ、過酸化硼砂若しくは過酸化カルシウム、過酸化マグネシウム等が使用される。之等は普通2—4%位の程度に配合され、水に合へば過酸化水素を發生して歯牙を漂白すると同時に強力な殺菌作用が生ずるのである。

粉歯磨の最も普通の色は薔薇色であつて、之は主にカルミンが使用される。此の外衛生上無害の色素を使用すれば如何なる色彩にも着色が容易である。

市販の粉歯磨には色々種類があるが、何れも以上述べた各種の原料を適度に加減配合したものである。

處方例 1. 沈降炭酸石灰

炭酸マグネシウム	70 g
オリス根末	5 g
オーリス根末	10 g
薬用石鹼末	5 g
乳 糖	10 g
香 味 料	1.5 cc

(香味料の一例)

薄 荷 脣	1 g
薄 荷 油	2 cc
冬 緑 油	2 g
レ モ ン 油	1 g
有 加 里 油	1 g

處方例 2. 炭酸石灰

白 糖 末	5 g
薬用石鹼末	5 g
炭酸マグネシウム	10 g
過硼酸曹達	3 g
香 味 料	2 cc

(香味料の一例)

薄 荷 油	3 cc
冬 緑 油	2 g
チ モ ー ル	1 g
桂 皮 油	1 cc
丁 香 油	0.5 g

2) 煉歯磨 Tooth (Dental) cream or Tooth (Dental) paste

煉歯磨は粉歯磨を水、グリセリン、蜂蜜又は單舍利別などで捏練せる多

少軟めの所謂クリーム状のものと稍硬めのものがある。前者は普通 Tooth cream 又は Dental cream と稱し、錫製の押出しチューブに詰められ、後者は Tooth paste 又は Dental paste の名があり、廣口壺又は蓋物等を容器とする。然し乍ら之等の呼稱は決して厳格な區別はなく、Tooth paste 又は Dental paste と稱しチューブ入りのものもある。

煉歯磨の主な原料は粉歯磨と同様に沈降又は輕質の炭酸石灰である。此の外硅藻土、カオリンなどで一部代用される事もある。石鹼は煉歯磨の必須原料である。オリス根末、炭酸マグネシウム、重炭酸曹達其の他の粉歯磨原料は煉歯磨にも亦同様に用ひられる。唯過硼酸ソーダ、過酸化カルシウム等の如き酸素を發生する原料は煉歯磨には使用出來ぬ。何となれば保存中水分と反應して分解するからである。

煉歯磨の結合液は最も普通にグリセリンが使用される。グリセリンは又防腐性を有してゐる。然るに單に粉末の原料をグリセリンで練りたるものには時間が経つてグリセリンと粉末分と分離する虞れがある。従つて此の分離が起らぬ様に豫め澱粉又は膠質のものをグリセリンと水の混合液で煮てクリーム状の糊を作り、之を併用する。グリセリンの代りに單舍利別を、若しくは之と併用する場合もある。

處方例 加里石鹼	10 g
澱 粉	6 g
水	20 cc
グリセリン	80 g
沈降炭酸石灰	90 g
香 味 料	3 cc
(香 味 料)	
ローズ油	30滴
薄 荷 油	40 g

有 加 里 油	30 滴
丁 香 油	20 △
ア ニ ス 油	10 △
冬 緑 油	20 △

澱粉に水を加へよく練り、之にグリセリンを加へ、次に絶えず攪拌し乍ら之を熱すれば糊状となる。之に加里石鹼、沈降炭酸石灰及香味料又必要に應じて色素を加へて捏練する。

練歯磨に歯磨石鹼 (Tooth soap) と稱するものがある。之は普通の練歯磨より更に硬いもので、圓型、棒状或は扁平型又は扁四角型などになつたものを油紙又は錫箔などで包むか、扁平な容器に容れたるもある。使用の際は濕した歯刷子で表面から擦り取つて用ゆるのである。原料は普通の練歯磨と同様であるが、特に石鹼分を多量に混入してゐるのが特徴であり（少くも 20% 以上）、初めアルコールを使用して練るので、時日の經過に従つてアルコール分が揮發し、次第に硬く乾燥する。

3) 水 歯 磨 Tooth wash or Liquid dentifrice

水歯磨は石鹼或はキラヤ皮 (Quillaja) 又はサボニン (Saponine) を水及アルコール、時にはグリセリン、單倉利別などを加へた混合液に溶解しめ、之に香料、色素を配したもので、粉歯磨、練歯磨などの代用品である。キラヤ皮は石鹼皮とも稱せられサボニンを多量に含んでゐる。サボニンの溶液は石鹼と同様に振盪すれば甚だしく泡を生ずるが、石鹼の如く加水分解してアルカリ性反応を呈する性質はない。

處方例 1. 精製オリーブ油石鹼	4 g
冬 緑 油	6 滴
薄 荷 油	10 △
レ モ ン 油	12 △
アルコール	20 cc

水	80 cc
水溶性色素	適宜
處方例 2. キラヤ皮粉末	12 g
安息香酸	1 △
チモール	0.1 △
冬 緑 油	10 滴
薄 荷 油	10 △
有 加 里 油	5 △
グリセリン	5 cc
アルコール	40 △
水	60 △

全部を混合して時々攪拌し乍ら一週間位放置後濾過して用ゆる。

水歯磨は其のまゝか或は刺戟が強過ぎるものは水にて適宜に薄めたもので含嗽するか、或は歯刷子に濕して清掃するのである。

II. 含嗽剤 Mouth wash or Collutary

含嗽剤の目的は口腔内の醣酵を防ぎ、悪臭を去り、口腔粘膜を強壯にし、更に清涼爽快の感じを與へるに在る。

含嗽剤は硼酸、石炭酸、ザロール、過酸化水素、硼砂等の如き消毒殺菌剤に、普通の歯磨に用ゆる香味料や安息香丁幾及甘味料のサツカリン、グリセリン等をアルコール及水の混合液に溶かし、之に着色したものである。コップ一杯の水に茶匙一杯位の本剤を加へて含嗽に供する。

處方例 薄 荷 膜	0.1 g
サツカリン	0.2 △
硼 酸	1.0 △
有 加 里 油	10 滴
冬 緑 油	10 △

アルコール	50 cc
水	50 △
色 素	適宜

III. 香 錠 Cachous or Breath perfume

香錠は口中の悪臭を去り且つ口中の清涼爽快感を保つ爲に工夫されたものであつて、甘草粉末又は砂糖、乳糖等に香味料を配し、ゴム液などを加へて練り、之を丸薬型か、薄板状の正方形、長方形或は細長く針状に伸ばして細かく切つたものなどがある。而して丸薬型は銀色其の他の衣を被せたものもある。

處方例	薄 荷 油	1 cc
	レ モ ン 油	0.5 △
	冬 緑 油	0.5 △
	桂 皮 油	0.5 △
	丁 香 油	0.1 △
	カ ル ダ モ ン	2 △
	バ ニ ラ	2 g
	オ リ ス 根 末	4 △
	砂 糖	7 △
	甘 草 粉 末	30 △
	ア ラ ピ ャ ゴ ム 液	適宜

最初固體原料を充分に粉末にし、之に液狀原料を加へてよく練り、上記せる適當の形に仕上げる。

若し銀衣を被せんとするならば稍乾燥した丸薬を銀粉を丸盆等に廣げたる上に載せ、掌にてゴロゴロ轉ばせ銀粉を平均に附着せしめるか、一時に多量を製造する時は勿論機械操作が行はれる。

第四章 芳香品 Perfume

香粧品には本論の第一章より第三章に至る各項に就て述べたもの以外に別に主として香氣を楽しむ獨立した種類のものがある。香水、煉香水、匂袋、嗅ぎ香水、薰香などゝ稱するものが之である。

本書に於ては之等を芳香品の名の下に總括して獨立の一章を設けた。以下分類に従つて細説を試みよう。但し英語の“Perfume”は本章に於て述べる“芳香品”以外に、遡つて其の原料となる總ての“香料”をも含んで居る。

芳香品を分ちて液體芳香品、固體芳香品の二種とする。

I. 液體芳香品 Liquid perfume

液體芳香品は主にハンカチーフ用の香水と床まき、絞り手拭用等のローション（特に床まき香水）、トイレットウォーター及嗅ぎ香水の四種がある。

1) 香 水 Handkerchief perfume

香水は一言にして之を蔽へば天然の動植物性香料乃至人造香料を配合してアルコール（酒精）に溶解し、必要に應じて之を着色せるものなりと云へよう。

最も優良な香水を造るには最も純良な原料を選ばねばならぬ事は勿論であつて、極微量と雖も不純なものゝ介入は香水に極めて重大な害を及ぼすものである。

香水原料中最も重要な香料の製造法は原料論に於て既に述べた。香料に次いで重要なものはアルコール（酒精）である。

香料はそれ自體芳香分子を揮散するものであるが、之を濃厚なまゝ嗅ぐ

時は香氣苛烈に過ぎ、甚だしく靱神經を刺戟して時には麻痺せしめ、或は眩暈を起す事さへある。然し乍ら之を適度に稀釋すれば馥郁たる優雅な芳香を發するに至るものである。

香料の稀釋剤として理想的なものはそれ自體全く無臭にして、且つ總ての香料を極めて容易に溶解し、永く置いても變化しないものたるを要する。

今日最も普通に且つ一般的に用ひられてゐる稀釋剤は、アルコールである。

アルコールは容易に蒸發するものであるが、香料稀釋剤としては蒸發速きに失せず、總ゆる香料に對し最良な溶剤となり、且つ全く變化せず分解もせぬものである。唯惜むらくは僅かに特殊の匂ひを持つて居る事であつて、又往々フーゼル油或はフルフロール其の他の有臭不純物を含んでゐることもある。之等は香水の微妙優雅な匂ひを破壊變化しそしめる力が頗る大きい。從つて香水に使用するアルコールは之等の微量な不純物を完全に除去する必要がある。

アルコールを脱臭精製するには色々の方法がある。アルコール(95%)一立に對し耳かき二、三杯の過マンガン酸カリ粉末を加へ、時々振盪して數時間置けば、初め紫色を呈した液が次第に變化し遂に褐色の沈澱が生ずるので、之に微量の炭酸石灰を加へて蒸餾する。蒸餾の初頭約10%と、最後に蒸餾器に残る約10%とは不純な夾雜物があるので之を除き、其の中間の蒸餾分約80%は精製アルコールとして純良なものである。此の方法によれば大部分の不純物は酸化されて、前後に除かれる20%中に混入して除去出来る。又アルコールに約1%程度の脱臭用炭粉末を加へ、時々攪拌しつゝ一週間位放置せる後之を濾過して使用するもよい。香水の製造に用ゆるアルコールの强度は90%以上のものでなくてはならぬ。此の强度

が増加すれば香料の溶解性も増加する。

近頃では此の外にプロピールアルコール、エチールフタレートなども稀釋剤として使用される事がある。

植物性芳香油は無色のものは極めて稀れであつて、皆多少の色を有してゐる。從つて香水にも夫々特有の色調を帶びるのであるが、此の色は匂ひに次いで重要なものであつて、適度の色は反つて香水の美的價値を増加する事ともなるが、又濃厚に過ぎる時はハンカチーフ等を汚染する原因となるから香水の色はなるべく薄いものがよく、特に色素を加へて着色する場合にも、色素の量はハンカチーフに色が附着せぬ程度であつて、其の性質はアルコールに溶解し、日光によりて變化せぬものが選ばれる。香料の中には自然に褐色を呈したものが甚だ多く、從つて香水も淡褐色を帶びたものが中々多い。然し特に褐色に着色する必要のある場合には、ラタニー(Rhatany)と稱する植物の根或は其のアルコール浸液が使用され、緑色の着色料は普通葉綠素である。又紫檀を用ゆれば赤褐色となり、赤色にはカルミン、黃色の場合にはサフラン或は薑黃(Curcuma)が用ひられる。ジョンキール油も黃色の着色料として往々用ひることがある。然し乍ら香水は一般に香料の持つ自然の色即ち多くは淡褐色か、或は特に淡緑色に着色される事が最も多い。

香水製造原料に關する要旨は大體以上で盡されたと思ふ。仍て香水調製上の匂ひの組立法(Composition)を次に述べよう。

香水は一般に香料をアルコールに溶解して造る事は前に述べた通りである。然るに今此處に一種の香料、例へば天然のローズ油のみを單にアルコールに溶解すれば、芳香品たるローズ香水を得るかと云ふに決して然らず。斯くて得られた香水は其の匂ひが餘りに單調に過ぎて生彩なく且つ優雅味に乏しく、然も瞬時に香氣發散して持続性が少ない。良好な香水は優雅

味に富み、持続性が強く、香氣の高いものである。即ち香水の組立には優雅味、持続性、及香氣の强度なる三點が必須な條件である。

香水の優雅味は一種の香料のみでは決して得られぬ。必ず此の匂ひに調和する他の香料を添加する事によつて初めて得られるものである。換言すれば、AとBの香料を各別個にアルコールに溶解せるものは何れも優雅味に乏しいが、若しAとBが互によく調和する香料なる時、AとBを同時にアルコールに溶解すれば、其の香水は前の數倍も優雅味に富んだものとなる。之を例ふれば音楽の演奏に於て、伴奏なき獨唱或はヴァイオリン其の他の器楽の獨奏を聞くとすれば、如何にそれが單調な無味乾燥であるかは、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。一つの伴奏が如何にそれを生かすかは之又想像の外である。

之と同様に香水の調製の場合に於ても一種の香料を基本とし、之に調和する他の香料を伴奏的に配合して優雅味を生ぜしむるか、或は交響樂の如く互に調和する數種或はそれ以上の香料を配合し、其の複雑を統一する事によつて一大管絃樂の演奏を髣髴せしむる如き優雅味の豊富なものを得るやうに工夫するのである。

次は香氣の持続性である。香料は總て揮發性のものであつてその揮發速度は香料によつて自ら異なる。一般に動物性香料は植物性香料に比して揮發速度甚だ遅く、固體香料は液體香料より遅いことは云ふまでもない。之はとりもなほさず動物性香料及固體香料は植物性香料及液體香料よりも持続性が強いことを意味するのである。

香水の調製の際には其の持続性を保つ爲に必ず保留剤(Fixative)を使用する。保留剤は即ち揮發し易い香氣の揮發性を抑へて其の速度を緩めると同時に、總ての香料の揮發速度をも略同一にする役目をなすものである。調製せる香水に此の保留剤配合を怠るならば、其の中に配合されてゐ

る香料の揮發速度が各異なるから、揮發度の速いものから次第に發散する結果、ハンカチーフへ附けた最初の匂ひは時間の経過するに従つて種々に變化し、數時間後に殘る匂ひは初のものと甚だしく異なる事を發見するであらう。しかのみならず之等の香料は揮發性のみであるから持続性が少なく、短時間にして其の芳香が消散する。然るに適當な保留剤を選んで合理的に配合する時は、不思議に全部の香料の揮發速度が統一せられる結果、最初の匂ひも最後の匂ひも略同一の芳香となり、且つ強力な持続性が賦與されてゐるのである。即ち理想に近い香水とは斯くの如き性質を有つものを謂ふ。

香水の保留剤として使用されるものは、麝香、龍涎香、靈猫香などの動物性香料、人造麝香、クマリン、ヘリオトロピン、バニリンなどの人造固體香料、ペルーバルサム、トルーバルサム、安息香、蘇合香、沒薬などの樹脂類或は白檀油、パチヨリー油、ベチバー油、アンバーリキッド(人造龍涎香油)などの如き揮發度の遅い芳香油などである。即ち保留剤はそれ自體香料であつて、而かも揮發速度の極めて遅いものなのである。

保留剤は香水の主調となる匂ひ或は全體の匂ひの階調を破らぬ上、更に進んで其等と映發して益々優雅味を豊にする様なものを選ばねばならぬ。香水の調製技術に於ける匂ひの調和、階調等は練習に依つてある程度迄上達し得られるが、保留剤の選擇は極めて困難である。従つて優秀な香水は銳敏な嗅覚による永い経験と、熟練した技術を有つ者によつて始めて創造せられるもので、其の優劣は一に保留剤使用法の如何に係ると云ふも決して過言ではない。

香水の調製上第三の要點は“匂ひが強い”と云ふ事である。換言すれば香料の溶解剤たるアルコールを餘りに多量に使用して香料の濃度を減じ過ぎてはならぬ。一般にはアルコールに對し香料を10—20%位溶解せし

めるのが適度である。

配合香料中に香氣の弱いものがある時は、之と調和する香氣の相當強い香料を配する様に工夫し、又保留剤とても必要以上に多量に使用してはならぬ。保留剤は揮發度の遅い所謂重い匂ひであるから、之を多量に配合する時は香水の匂ひの調子は甚だ鈍重となり、その結果强度を減ずる虞れがある。

香水の匂ひの組立法は大體以上の通りである。次に香水の製造法に就て述べよう。

香水の最も合理的な製造法は芳香花精 (Essence, Extrait or Extract), 香精 (Spirit), 丁幾 (Tincture), 芳香油及保留剤等の原料を適當に選び其の香氣がよく調和するやう適宜に混合し之を精製したアルコールに溶解するのである。此處に芳香花精と稱するは前に原料論の香料の項で述べたやうに吸收法に依つて花香を精製豚脂に吸收せしめた花香脂 (Pomade) をアルコールと共に振盪し、花香脂に含まれてゐる香分をアルコールの方へ溶解せしめたものゝことである。豚脂はアルコールに溶け難く、且つ香分のみが容易に溶解するから残された豚脂を分離すれば芳香花精が得られる。之を更に蒸餾してアルコール分を除きたるものが芳香花油 (Essential flower oil) である。又香精と云ふのは既に精製して得たる天然或は人造芳香油をアルコールに溶解せしめたものであつて、其の濃度は一定せぬが略 1—10%位である。動物性及樹脂性の保留剤は一般に丁幾にして使用する。丁幾とは動物性香料や樹脂性香料を細末にしてアルコールに浸し、其の中に含まれてゐるアルコールに溶ける芳香分のみを浸出せしめたものを云ふ。

斯くて配合し製造した香水は大きい容器に詰めて密栓し、其のまゝ數週間以上或は性質によりては數ヶ月間以上暗所に貯藏すると、香水は充分に

熟成し醇化する。之を更に濾過し或は着色して壇詰にするのである。

尙此の原料たる花精、香精及丁幾も亦製造後少くも數週間以上経過したものを使用せねばならぬ。何となれば製造直後のものは香分がナマにて充分にアルコールになじまぬから、之で製造された香水は數ヶ月以上を経なければアルコール特有の臭氣が抜け去らないのである。

香水製造の合理的過程は以上述べた通りの方法が最も宜しいが、若しそを簡単に製造する事を望むとすれば、花精、香精を使用せずに、精製アルコールに直接に天然芳香油或は合成芳香油の適宜配合せるものを溶解せしめて保留剤を加へるのであるが、但し此の方法に依つて作られた香水は充分熟成する迄に少くも一兩年を経過せねばならぬ。

以上に關聯して香水の保存法及使用法に就て述べん。

特例を別として一體に香水は比較的分解し易い芳香油を含有してゐるのが多いから、特に保存に注意を拂はなければ匂ひ及色調共に變化する。最も害を與へるは光線である。太陽の直射光線に至つては殊に甚しく、或は褪色し或は變色して次第に黒ずんで溷濁を生じ、次で匂ひも亦分解し變化する。従つて香水の保存には暗い場所が最もよい。販賣店に於ける香水のショーケースが直射光線の届かぬ奥の方に置かれてあるのも全く此の理由からである。

溫度の影響も忽にならない。なるべく夏冬氣温が平均してゐる場所が多い。餘りに冷やせば芳香油の種類に依りても、或は結晶性香料の或種のものゝ如きが混入せる場合は、アルコールからそれ等が分離析出し、反之餘りに高溫の場所では芳香油は容易に酸化し分解を早める事となる。又空氣に接する事も禁物である。何となれば空氣中の酸素に合つて香料が酸化し分解して樹脂化する虞れがある。従つて香水の壇は小型がよく、且つ栓は硝子のすり合せがよい。

又香水の使用後壠口は叮嚀に拭いて置かねばならぬ。壠口に残つた香水は空氣に依つて酸化し樹脂様のものとなる。若し之が次の使用時などに容器内に流れ込むならば、其の全部の匂ひを破壊することゝなるから、香水は成るべく壠口から直接にハンカチーフなどにつける如き事は廢止し、適當な香水吹きに移して使用に供すべきである。而も壠中の香水が遞減するに従つて香水と空氣とが接觸する結果、香料の酸化が早められる虞れがある。仍て空氣に觸れることを防ぐ爲に香水が絶えず口元迄充盈するやうに、小さい硝子玉又は南京玉の如きものを壠中に投入して空氣を追ひ出すも非常によい事である。

香水には其の匂ひの組立法から見て大體3種の形式がある。

(イ) 天然の芳香花油を基本とした香水 香水の種類は枚舉に遑ないが、中にも天然に存在する花の匂ひを其のまゝに採り入れた種類の香水が最も多く、且つ香水の中でも中々重要なものである。例へばローズ香水、バイオレット香水、月下香々水、ジャスミン香水、オレンジ香水などで、之等の香水は天然に得られる夫々の花香油を各基本の匂ひとして前項の工程を経て製せられる。尤も之等天然の芳香花油は生産量少なく價格も頗る高いので、近頃では之等に代る人工芳香花油が多量に使用される。簡単に云へば之は最初天然花油を分析して其の中に含まれてゐる各種の成分と組成の割合を究めたる後、之等の一つ一つの成分を他の安價な原料から合成し、天然油と同率にそれ等を混合して作つたのが此の人工芳香花油である。従つて大體に於て其の匂ひは天然のものに近いとは云へるが、然し自然の最奥の秘庫は開くべくないので、分析しても表はれぬ極微量のもの或は分析中に分解されて他のものに變化するものなどが數種あつて、之等が天然芳香花油の芳香花油たる秘鍵を握り、それによつて天籟の妙香を發するのであるから、之等に缺ける人造花油は到底自然のものゝ敵ではない。

こゝに於て人造芳香花油を主に使用した香水は所謂安物の感じからは免れぬ。

(ロ) 天然の花の匂ひをスケッチした香水 ローズ或はバイオレット、ジャスミンなどの花精は夫々其の花から製造し得られるものである。然し乍らライラック、ヘリオトロープ、梅の花、藤の花などの如きは花の匂ひはあるが、其の香分の含有量が極めて少ないので、前者の如く花精を花から取る事は殆んど不可能である。仍てライラック、ヘリオトロープ、梅の花、藤の花等の香水を作るには、他の數種の同系統の芳香油を適度に組合せ調合して其の花の香氣を模倣する、即ちスケッチする事に依つて初めて得られるものである。之が香水の第二の形式のものである。

(ハ) 天然に存在する香氣ではなく、數種の匂ひの調和に依りて作られる香水 此の形式に屬する香水には Ideal Flower (理想の花), Bouquet d' Amour (愛の花束), Soir de Paris (巴里の夜), Jockey Club (競馬俱樂部) 等の名稱のものがある。

此の内“理想の花”, “愛の花束”などは調香技術者によつて創作される外ない匂ひと云ふべきであつて、つまり作者の想像の翼にのつた幽幻な感じを、數種の香料の調和に依つて表現したものゝ一例である。其の他も亦之に準ずるが幾分か具體的である。“巴里の夜”は夜の巴里のかもす空氣の感じを、“競馬俱樂部”はその複雑な氣分を表はした香水である。

或は又 Merry Garden (歡樂の花園), Paris (巴里), 銀座, Monte Carlo (モンテカルロ), Kiss-Me-Quick (早く接吻して頂戴), Honey Moon (蜜月旅行), Serenade (夜の調べ, 小夜曲) 等の美しい象徴的な名稱のものもある。而して何れも其の對稱又はそこに釀された雰圍氣から受けける情緒や氣分を匂ひによつて象徴した名香水たる事には上例と同工異曲である。

今此の形式の香水を音樂に比較して見れば丁度管絃交響樂に相當するものであり、又前に述べた(イ)及(ロ)は獨奏に當ると云つてよい。

2) ローション Lotion

香水は主にハンカチーフに使用されるもので、濃度もアルコールに對し香料分が 10—20% 位が普通である。然し中には濃度が 4—5% 前後の稀薄な種類のものがある。それは主に男子用としてハンカチーフに、調髪時に、或は床撒き、絞り手拭等用途頗る廣いものであつて、特にローションと稱されてゐる。即ちローションは香水の一種ではあるが、其の濃度薄く使用の途も香水と自ら異り一般的のものである。

ローションの作り方は香水と殆んど同様であり、唯アルコールと香料の混合比が香水のそれと異なるだけである。

3) トイレツトウォーター Toilet water or Perfumed water

トイレツトウォーターと稱するものもローションと同様に香水の一種であるが、ローションより更に幾分か香分少なく且つ一般に多少水分を含有してゐる。之は浴室、室内、病室等の撒布用から理髪店等で一般に使用され、其の匂ひによりて夫々ラベンダーウォーター、ヴァイオレツトウォーター、ローズウォーターなどと命名して販賣されて居る。

トイレツトウォーターで最も有名なものはコロンウォーター (Cologne water), フロリダウォーター (Florida water), ポルトガルウォーター (Portuguese water or Eau de Portugal), ベイラム (Bay Rum) 等であらう。

之等の製造原料たる花精、香精、丁幾及其他の香料は香水原料と略同一のものである。之等の原料をアルコールに溶かし、最後に水を加へるとミルク状に溷濁する。之にタルク等の粉末を加へ濾過して澄明となし、數週間暗所に靜置して熟成せしめるのである。

コロンウォーター或はオードコロン (Eau de Cologne) もトイレツトウォーターであるが、特に水を加へず、濃度を高くして普通香水として販賣されるものもある。之は西暦 1709 年佛國のコロン市（現在のケルン市）に於て Giovanni Maria Farina が創製し初めて世に紹介された。今日でも尚 “Farina Cologne water” として販賣してゐる處もある。

コロンウォーターの最も重要な成分は橙花油であつて、之に他のシトロン性の香油例へばレモン油、ベルガモット油、ペチグレイン油（橙油）等を配したものである。始めて世に出たコロンウォーターは葡萄酒を蒸餾して採つたアルコールに之等の香料を溶解したものであつた。それが又葡萄酒製のアルコールにのみ調和し映發する如く、實に微妙馥郁たる香氣を發散するのであつた。今日でも最高級のコロンウォーターは葡萄酒蒸餾のアルコールに最良種の橙花油、レモン油、ベルガモット油等を溶解せしめたものである。然し一般に販賣されてゐる多くのコロンウォーターは普通のアルコールを精製し、之に上記のシトロン性香料以外に丁香油、ローズマリー油、ラベンダー油、アセチツクイーサー、麝香等を混合して溶解せしめたものである。

コロンウォーターの處方例を示せば次の如し。

處方例 Eau de Cologne Superior

ベルガモット油（最良種）	0.7 cc
レモン油（△）	1.7 △
橙花油（△）	1.0 △
ローズマリー油（迷迭香油）（最良種）	0.7 △
水	40.0 △
葡萄酒製（又は精製）アルコール	200.0 △

香料をアルコールに溶かし、之に水を加へ容器に入れて密閉し、數日間暗

所に放置して後に濾過する。

コロンウォーターにも Newport Cologne, Opera Cologne, German Cologne, Farina Cologne, Superior Cologne (上例處方), Imperial Cologne, Oriental Cologne, Victoria Cologne 等多種類の名稱がある。

フロリダウォーター (Florida water) はアメリカのフロリダに於て始めて製造されたので此の名がある。今日ではコロンウォーター同様に世界各地で製造されてゐる。フロリダウォーターの基調香料はシトロン性香油とラベンダー油であつて、之に香味料に用ひられる丁香油、桂皮油、肉荳蔻油 (Mace oil), 薄荷油などが配合される。而して安息香丁幾或はペルーバルサム、ストラツクス (エゴの木) などの丁幾が保留剤として使用され麝香其の他動物性の保留剤は特殊の場合を除く外は使用されぬ。フロリダウォーターも他と同様に製造後數ヶ月乃至は一年間位経過したものが賞用される。

處方例 Florida water

ラベンダー油	6.0 cc
ベルガモット油	1.5 △
丁香油	0.7 △
ローズゲラニウム油	6 滴
桂皮油	3 △
薄荷油	1 △
安息香丁幾	11 cc
水	20 △
アルコール	350 △

製法順はアルコールに香油及丁幾を溶解し、水を加へ數日放置して後濾過する。

ラベンダーウォーター、バイオレットウォーター、リラスウォーター等

はそれぞれの天然花精又は花香油（或は人工花香油）に他の香料を配し水及アルコールに溶解したものである。

ペイラムは頭髪香水の項に於て詳しく述べたからこゝでは省略する。因に我國では一般にペイラムを頭髪香水として使用するので、適當なフケ取りなどの薬品を配合してゐるが、歐米では總てトイレツトウォーターとして使用してゐるから歐米流にはペイラムはトイレツトウォーターに屬するも、著者は日本流に従つて頭髪香水部に分類したのである。

4) 嗅ぎ香水

嗅ぎ香水には二種がある。芳香醋及芳香アンモニヤ之である。

(1) 芳香醋 Toilet vinegar or Aromatic vinegar 芳香醋は化粧醋とも稱し、芳香油、バルサム及其の他の香料にアルコールと醋酸を加へて製したものである。香分の量は醋酸の刺戟臭を緩和する程度に使用される。醋酸は之等の香料に對して清涼爽快の芳香を發する作用をなすのである。

芳香醋は最初流行病等の空氣傳染豫防の目的で作られたが、實際の効力は疑問とされ、今日では單に醋酸の刺戟的香分で一時の惡氣分を拂ふことなどに利用されるものである。而して或は海綿に含ませて婦人用の香醋盒に挿入し、或は後述するスメリングソルトの容器に入れて嗅ぎ香水として使用してゐる。芳香醋は又風呂或は洗面器等に少量を入れて洗滌に使用され、或は清々しくする爲病室の撒布にも使用される。

芳香醋の原料たる醋酸は極めて純粹な冰醋酸或は良質の醋を使用せねばならぬ。木醋から製造した不純な醋酸は不快な惡臭を有し使用に堪えない。

芳香醋には Lavender vinegar, Rosemary vinegar, Cologne vinegar, Hygienic vinegar などの名稱がある。佛蘭西では “vinaigre de toilette” と總括して稱へてゐる。

芳香醋と化粧醋は今日では同様の意味に用ひられてゐるが、元來芳香醋

の醋酸は濃く、化粧醋は其の稀いものである。冰醋酸は 14°C で結晶するから、之を多量に含む芳香醋は寒冷の場所では結晶する事がある。

芳香醋、化粧醋共に使用の際は水で稀釋しなければならない。若し其のまゝ皮膚に用ゆる時は激烈に刺戟する虞れがある。

處方例 1. 芳香醋

冰 醋 酸	100 g
樟 脂	12 ♂
ラベンダー油	2 cc
肉 荚 蔻 油	1 ♂
ローズマリー油	1 ♂

樟脂を醋酸に溶解し、之に香油を加へ、二、三日放置して濾過し化粧壇に詰める。

處方例 2. 化粧醋

丁 香 油	8滴
ラベンダー油	5 ♂
レ モ ン 油	12 ♂
ベルガモット油	12 ♂
冰 醋 酸	8 g
アルコール	100 cc
水	100 ♂

先づ香料をアルコールに溶解し、之に冰醋酸と水を加へてよく攪拌し、數日後濾過して容器に詰める。

(口) 芳香アンモニア或はスメリングソルト Smelling salts or Ammonical perfume アンモニアは不快な刺戟性の悪臭を有し著しく涙腺を刺戟するが、之を稀釋して香料を加へる時は、芳香醋と同様に、反つて他のトイレツトウォーター等に求められぬ清涼佳快な芳香を放つので、頭痛

眩暈或は卒倒等の場合之を嗅げばよく氣分を回復するものである。又毒虫等にさされた局所に塗布すれば中和する効力もある。

香粧品としての芳香アンモニアは “Smelling salts” (スメリングソルト), “Inexhaustible salts (不盡鹽)”, “Preston salts” 或は “Pungent” の名稱で販賣されてゐる。芳香アンモニアはアンモニアを含有してゐる爲に、若し容器が倒れ或は容器から漏れる時は、器物、衣服等を損傷する虞れがあるから、從來は必ず容器中に細斷した海綿、浮石の小片、素焼の小片、硝子製の南京玉などを挿入した。Smelling salts の名はこゝから起つたのである。今日は之等の代りに結晶状の炭酸アンモニウムが用ひられる。炭酸アンモニウムは分解してアンモニアを發散するから、芳香アンモニアの挿入剤として頗る合理的なるのみならず透明な結晶状故、之を同じく透明な容器に入れると實に綺麗である。炭酸アンモニウムの代りに硫酸カリウムの小結晶も用ひられるが、之は炭酸アンモニウムより更に透明美麗な結晶である。スメリングソルトを製造するには先づ容器に細断した海綿、炭酸アンモニウム若しくは硫酸カリウムの結晶（成るべく均一な）等を挿入し、次に香料を加へたアンモニア水又は強アンモニア水とアルコールの混合液 (Spirit of ammonia) を注入する。強アンモニア水とアルコールの混合液はアルコールと同様によく香料を溶かす性質があるから、こゝでは之を使用する方が都合がよい。

芳香アンモニアに使用される香料はラベンダー油が最も賞用されるが、ローズ油、丁香油、レモン油、ベルガモット油なども使用される。然し麝香、靈猫香及其の他の強い匂ひの香料は餘り適當でない。

スメリングソルトを詰める容器は通常小型な廣口の硝子壇が使用される。栓は共口のもので完全にすり合せしたものでなければならぬ。

處方例 1. ラベンダー スメリングソルト

炭酸アンモニウム(均一結晶)	適宜
丁香油	5滴
ラベンダー油	1.5 cc
ペルガモット油	10滴
強アンモニア水	30 cc

先づ容器に均一な炭酸アンモニウムの小結晶を充分に挿入し、之に以上の混合液をあふれない程度に一杯に注入する。

處方例 2. バイオレット スメリングソルト

容器に炭酸アンモニウム又は硫酸カリウムの均一な小結晶を詰め、強アンモニア水とアルコールの混合液にヴァイオレット香油3—5%程度及油用綠色素適宜量を溶かしたもの注入する。

II. 固體芳香品 Solid or Dry perfume

古代埃及人、バビロン人、アッシャリヤ人、ペルシャ人、猶太人、印度人又は支那人の如き世界最古の文明人の間に於ては、當時芳香植物の乾燥した葉、花、皮、根及樹幹又は樹脂などが香料として或は薰香として使用されたのである。而してそれは液體の香料や香水が出現するまでの可なり長い間、極めて近い最近世に至るまで凡そ數千百年に亘つて、此の種の固體の芳香材料を或は其のまゝに、或は又粉末にして混合されたものを芳香品として種々な方法によつて愛用しつゝけて來たのである。

然るに十八世紀に入ると、世を擧げて芳香品は液體萬能時代を現出せるものゝ如く、二十世紀は正に其の全盛の頂點にあると云ふも過當に非ず。全く時代に置去られ、忘却の深淵に投じられた固體芳香品を取り出して俎上にするのは、或は時代錯誤と云はれるかも知れない程、それ程固體の芳香品は現代に於て一部の需要を充たす生産の餘湍を保つあるのみで、何等

の改良も研究も一切闇扱せられて居る有様である。

固體の芳香品には煉香、香粉又は匂袋、固形の芳香品及薰香等がある。(因にスメリングソルトを固體芳香品に屬すると説をなすもあるが、著者は之を嗅ぎ香水として前項液體芳香品で既述した。)

1) 煉香

煉香は固體芳香品の内で最も近代色濃厚なる、見方によりては香水を遙に凌駕する魅力を有し、其の發賣も亦比較的最近の事に屬し、エボナイト、ベークライト、陶磁器或は硝子製の意匠を凝らした小容器に詰められた頗る珍奇なものである。

煉香は外面に露出する肉體の一部即ち耳、頸或は腕などに直接に塗布し體温によつて芳香を自然に發散せしめるものである。煉香の基礎原料は精製脱臭せる豚脂、牛脂、蜜蠟等の外固形パラフィン或はワセリン等が使用される。之等を單獨又は二、三種を混合して加熱熔融し、次に動植物性香料或は人造香料を、香水と同様に適當に配合して之に加へ(アルコールは使用せず)、全部を良く攪拌し混和融合を度として加熱を止め、煉り乍ら冷却せしめて容器に詰める。

煉香は微量の使用で足りるから、配合する香料は極めて良質純粹なものを選ばねばならぬ。安價な煉香にはワセリンに粗悪な人造香料を配したやうなものが多いため注意しなければならない。

以上の基礎原料の外著者は花蠟(Flower wax)を用ひて實驗したが、之によれば最良の効果を期待されるのである。花蠟はそれ自身芳香を有して居るので、之に調和する香料を配合する時は、香氣の醇化熟成が非常に早い。若し入手し得られれば吸收法に依つて採取した花香脂(Pomade)を主調とし、それに他の數種の香料を配するもよい。

處方例 ローズ煉香

花蠟又は晒蜜蠟	3 g
脱臭した豚脂	1 △
天然ローズ油	2 cc
人工ローズ油	1 △
人工麝香	0.1 g

花蠟又は晒蜜蠟及豚脂を 100° C 以下にて熔融し、之に香料を加へ、充分に混和した後加熱を止め冷却し乍ら丹念に練合せる。

2) 香粉又は匂袋 Sachet powder

香粉はオリス根末、白檀粉末、薔薇の花瓣、バニラ豆、トンカ豆、ラベンダーの花、ベチバー、橙皮、安息香、麝香、靈猫香などを原料とし、之等にバニリン、クマリン及各種の花香油、人工香油を配して製造するが、香粉には自ら粉末の細かいものと荒いものがある。之を絹か麻製の小袋即ち Sachet (サッセー) に詰合せし匂袋として用ひる。

香粉は斯様に稍原始的なものではあるが、反つて古典的な床しい香氣が體臭をこめて豊に漂ふあたりの調子は仲々棄て難い趣があるのである。

匂袋は机の抽出し、箪笥の中、又ハンカチーフ、手袋の函などの肌近き手廻品を入れるケース、或は文房具の函などの中に入れて置いて、長い間に微妙な香芽をそれ等のものに移す目的に使用される。

匂袋の移り香は甚だ高雅で且つ日本人ならば必ず特別な親しみを感じ得るもので、所謂東洋的幽幻香とも云へやう。又香水の浪費から起る如き度きつい香は決して感じない。

香粉の原料となるバニラ豆及トンカ豆は細片に初り、オリス根末を加へて碎きつぶして細かくする。麝香、靈猫香等を配合する時は豫め之にオリス根を加へて粉末とし、安息香、バニリン、クマリン、人工麝香のやうなものは其のまゝ乳鉢で粉末となし得る。ラベンダーの花、バラの花瓣、橙

皮等は薬用粉末機で粉末にして置く。總ての固體原料を斯様に粉末状にして置いてから液體香料を加へ全體を攪拌混合する。

香粉の原料は以上に挙げたやうなものであるから、其の香りは淡くなり易い。それで時々花精又は花香油を添加する事が必要である。例へばローズの香粉が薄れた時には、ローズ花精を加へる如きである。

處方例 1. フランギバニ香粉 (Frangipani sachet)

オリス根	30 g
ローズ花瓣	30 △
バニラ豆	2 △
安息香	2 △
白檀油	12 滴
ネロリー油	6 △
ラベンダー油	6 △
ベルガモット油	6 △
桂皮油	3 △
ピメント油	5 △
ローズ油	4 △

先づオリス根とローズの花瓣を別々に荒目の粉末にし、それを更めて混合し粉末機にかけて細粉にする。次に此の細粉の一部を乳鉢に入れ、豫め細片にしたバニラ豆を加へ、充分に搗き碎いて粉末にする。安息香それ自身は容易に粉末状になる。斯くて全部の出来上りたる粉末を混合し、之に液體香料を加へ均一に混和するのである。

處方例 2. ラベンダー香粉 (Lavender sachet)

ラベンダーの花	35 g
安息香	10 △
ラベンダー油	8 滴

ラベンダーの花、安息香を別々に細粉とした後で全部を混合する。

處方例 3. 手袋用香粉 (Glove sachet)

之は革製手袋の持つ特殊の不愉快な臭氣を除く爲めに手袋の函に入れる匂袋である。先づオリス根末二部、炭酸マグネシウム二部及タルク粉末一部とを混合し、此の混合物 30g に對し

ヘリオトロピン粉末	1 g
バニリン粉末	1.3 g
靈猫香丁幾	20滴
安息香丁幾	35 g

を附加する。但し上の處方は主としてヘリオトロープの香氣であるから、ヘリオトロピンの代りに欲するまゝに他の香料を以つてするも差支はない。此の香粉を小袋に入れ、手袋の函に入れて置く。

次に匂袋の代りに使用される Peau d' espagne (Spanish Leather) と稱するものがある。之はシヤムア (Chamois 猞羊の一種) の革又は白色のキツト (Kid 仔山羊の皮) を四角に切り、之にゴム液、グリセリン等を加へた香料を吸收させ、皮の裏を合せて二つに折るか、或は二枚の皮を裏合せに密着せしめて乾燥するのである。斯様に香料を革に吸着せしめて置けば、其の香氣は一年間位は優に保つて居るものである。Peau d' espagne は匂袋の代用としてトランク、引出し、戸棚、机或は手袋、ハンカチーフの函中に入れられ、或は之を細かく切つて婦人の衣服に縫ひ込む事もある。

匂紙は香水を吸取紙の様な多少分厚な纖維の太い紙に吸收させ乾燥せしめたもので、之も香袋と同様に使用される。

3) 固形芳香品 Bodied perfume

固體の芳香品の中には以上述べた煉香及香粉の外に菱形芳香 (Perfume lozenge), 芳香錠 (Tablet perfume or Frozen perfume) 百花香 (Pot pourris) 及香晶 (Crystallized Perfume) などの名稱のものがある。之等

は煉香や香粉と異り一種の形をなした固體の芳香品であるから、著者は之等を一括して固形芳香品として述べる。

菱形芳香は我國では未だ販賣してゐるのを見掛けぬが、之は澱粉、炭酸マグネシウム、オリス根末、デキストリン其の他の適當な粉末を混合し、之に香料と色素を配し、最後にゴム液を加へて軟質に煉る。次に之を 1 粒乃至 1.5 粒位の厚さに延ばし、菱形截斷機に掛けて菱形に切つたものを乾燥する。

菱形芳香は財布、ハンドバツクなどの中に入れ、或は机の抽出し、簞笥の中等に入れて使用される。

芳香錠は固形パラフィンを湯浴上で熔融し、香料を加へ、小さい型に注入して固め、適宜な大さの錠剤に仕上げたものである。使用の目的は菱形芳香等と略同様である。

百花香は十八世紀の末葉歐洲に流行した芳香品である。之は香粉と略同様な原料を用ゆるが、此の場合では細粉にせず比較的粗大な形狀のまゝに混合し、Pot pourri jar (百花香瓶) と稱する容器に詰め、蓋はおはず開口のまゝ置いて室内に芳香を發散せしめるものである。百花香に使用される原料の大さは豌豆を二つ割りにした程度を適度とする。従つてオリス根、安息香及其の他の人工固體香料は略其の程度の大さに成るべく均一に破碎する。而してローズの花瓣、ラベンダーの花は基礎原料であつて又百花香の大部分の量を占めるものである。香の良い百花香を作るには良い原料を精選する必要があるが、花精の様な高級香料を少量加へる事も亦此の香氣の冴えを益々高くすることになるであらう。

香晶と稱するものには樟腦或は龍腦を單獨に熔融し、之を型に流し込んで色々の形を附したものがあり、又樟腦、龍腦或はナフタリン等を原料とし、之に他の香料を附加して熔融し、色々の形に仕上げたものもある。之

等は何れも結晶香料が原料の大部分であるから製品も美麗な結晶状を呈してゐる。

香晶は匂袋と同様に簞笥、抽出しなどの中に用ひられ、又室内、便所等の臭氣止めにも使用される。樟腦、龍腦或はナフタリンを單獨に虫よけとして衣服の間に挿入する事は何處でもやることである。

4) 薫 香 Fumigating Perfume

薰香は之迄に述べた他の何れの芳香品とも異り、熱を與へる事によつて初めて芳香を發散するものである。而して恐らくは最も古い形式の芳香品と言ふべきである。

芳香を有する物質を炷くとか、或は抹香 (Incense) として薰するなどの事は人類が其の實生活に芳香品を取り入れた最初の形式であつて、主として宗教的或は儀式的の場合にのみ用ひられたものである。中世に至り薰香は病魔を防ぎ邪氣を拂ひ、或は病氣や死によつて汚された空氣を淨める意味にも用ひられたのである。我國にも此の風習が傳はり、其の後足利時代の前後から香道が勃興して趣味的方面にも進展した事は、香粧品の歴史の項に於て述べた通りである。

今日では液體芳香品の發達によつて、薰香は單に宗教的に或は一部人士の間に趣味的に愛玩されて纔に貽つて居る。

薰香に用ひられる原料は沈香、白檀、桂皮、丁香などの如く樹木の皮、葉、根等の粉末か、乳香、安息香等の芳香樹脂或は麝香、靈猫香、龍涎香の如き動物性の香料が大部分であるから、其の發散する香氣も芳香花の如きものではなく、バルサム様又は薬味料類似のものである。

薰香には形の上から固形薰香、粉末薰香、薰香紙などがある。

固形薰香は上に舉げた各種の薰香原料に他の香料を少量加へ、賦形剤として紫檀末、木炭末或はタブの木の葉の粉末等を使用し、之に少量の硝石

を配合してゴム液で練り、圓錐状、線状、渦巻状、或は錠剤の形に仕上げ乾燥したものである。

紫檀末は赤色を帶びたものゝ製造に用ひ、木炭末は黒色のものゝ製造に用ひられる。硝石は途中火の消えぬ様燃焼を助ける爲に用ゆるのである。此の外特殊の色素を加へて着色する事もあり、又蚊とり線香の如きは特に除虫菊の粉末を混合したものである。我國に昔からある線香とか、粒状の香或は近來の蚊とり線香などはこの種類のものである。

粉末薰香の原料は大體固形薰香と同様であるが、木、皮、葉、樹脂の外に更に乾燥した花の粉末や芳香油、丁幾なども配合されるから、外觀も割合に綺麗且つ匂ひのよいものが出来る。而して粉末薰香には木炭末は使用されぬ。之は外觀の醜悪化を防ぐ爲であり、更に外觀を綺麗にする爲豫め着色したオリス根末が混合される事もある。硝石も亦粉末の場合は必要がないので普通使用されてゐない。

我國に於て往時流行した香道用の香は多く此の粉末薰香であつて、唯最近のものと異なる所は芳香花、芳香花油、オリス根末などを缺いてゐることである。佛事用抹香も亦此の種類のもので、主として乳香、白檀、安息香等を原料としてゐる。

薰香紙は樹脂、ストラックス、少量の芳香油等をアルコールに溶かし、吸取紙の如き分厚の紙類に吸收させ乾燥し、6—9 線位の四角形に切り、其のまゝに燃すか或はストーブ等の上に載せて温め芳香を發散せしめるものである。

(終)

索引

(A B C 順)

A

- アバタ.....57
- 亞鉛華.....102
- アイシャドウ.....158
- 堈.....14
- アミド化合物.....49
- アミドン・ド・リ.....80
- アムモニア水.....109
- アンバーグリス.....37
- アネトール.....46
- アニス.....34
- アニスアルデハイド.....44
- 安息香.....36, 87
- 安息香酸.....87
- 安息香酸メチルエスター.....47
- 安息香酸曹達.....87
- 安息香丁幾.....75
- アントラニール酸メチルエスター.....50
- アラビヤゴム.....86
- アラギン酸.....55
- 洗粉.....14, 124
- アルデハイド.....42
- アルコール.....40, 192
- アルmondクリーム.....83, 140, 142

B

- アルmondミール.....127
- アルmondミルク.....83
- 亞硫酸ソーグ.....180
- 汗.....11
- アセモ(汗疣).....117
- 汗しらず.....150
- アセトン.....77
- アセトフェノン.....45
- 壓搾法.....23
- 梅花香.....7
- バイオレット.....34
- バイオレットウオーター.....200
- 麥芽糖.....72
- バンドリン.....86, 171
- バニラ.....44
- バニラ丁幾.....76
- バニリン.....44
- バニシングクリーム.....68, 145
- 蕃椒丁幾.....73
- 薔薇.....31
- バツソリン.....86
- バスソルト.....110, 111
- Bee wax.....60

ペイ	31
ペイラム	166, 200
ヴェネチア滑石	105
紅	4, 5
紅粉	155
べにおしろい	155
紅類	155
ベンズールアルコール	41
ベンゾイン	36
ベンゾアルデハイド	43
ベルガモット	32
ベルツ水	131
美男桂	84, 172
鬚付油	170
美爪料	159
ビタミン A	94
ビタミン D	94
棒紅	156, 157
ぼう眉	6
ボルネオール	42
没食子酸	178
葡萄糖	72
舞臺香	152
ブリリアンチン	69, 173
白檀	33
C	
Castor oil	55
茶油	54

地蠟	63
チヨコレート	59
抽出香料	23, 38
チモール	45
丁幾	196
沈香	33
沈降炭酸石灰	107
鎮靜鹽	111
丁字	31
丁香	30
Coconut oil	52
D	
男性ホルモン	98
脱毛剤	181
デキストリン	72
デチールアルコール	51
ドライミルク	82
動物性香料	23
動物性天然香料	37
動植物性油脂	51
E	
エチールフタレート	193
江戸の水	8
エツグシヤンプー	80
エツグシヤンプーリキッド	163
エゴの木	202
エナメル除去液	160

臘脂	2
鹽基性炭酸鉛	101
鉛粉	2
鹽酸アミドフェノール	180
鹽酸キニーネ	91
鹽析	120
エタノールアミン石鹼	70
エーテル振動説	21
エチールアルコール	71
液體芳香品	191
エマルション	136
エオシン	98
エルゴステリン	96, 140
エツセンス	25
エスター	46
F	
フェニールアセトアルデハイド	43
フェニールエチールアルコール	41
フェノール	45, 88
フェノールエーテル	45
フェノールフタレン	98
附着力(ツキ)	101, 152
不盡鹽	205
粉末薰香	212
粉末爪磨	159
粉乳	82
ふのり	85, 161
フランギバニ香粉	3, 209
G	
外皮除去液	159
含嗽剤	189
含水油性クリーム	138
鯨蠣	60
月下香	26
ゲラニオール	40
ギップス	108
ギオヴァンニ・マリアフアリナ	4
合成香料	23, 38
合成染毛剤	179
グツドカラ	57
グライコール	69
グリセリン	51, 68, 130, 186
グリセリンコールドクリーム	140
グリースペイント	153, 154
牛乳	81
牛脂	57
H	
ハーバー法	109
蜂蜜	79, 130
ハフニ	5
廢液	120
ハイゼニツククリーム	142

薄荷	35	ホルモン	96
薄荷脑	35	保留剤	30, 75, 76, 77, 194
白蠟	60	硼酸	111
白陶土	105	抱水クロラール	91
白糖末	78	硼砂	112
齒磨	183	百花香	210
齒磨石鹼	188	百花香瓶	211
ハラヤ	5	表皮	10, 12
櫟蠟	59	I	
へちま水	83, 133	一番素地	121
ヘンナ	174, 178	インドール	49
ヘリコトロビン	44	イランイラン	28
ヘリオトロープ	34	色留剤	176
被覆力(ノビ)	101, 152	伊勢白粉	5
皮膚の衛生	13	所謂脳膜炎症	100
皮膚の機能	12	J	
皮膚の構造	10	麝香	37
鬚剃用石鹼	123	麝香丁幾	75
皮下組織	10	デヤスミン	36
蓖麻子油	55	デアミドフェノール	179
皮脂	11, 13	デアスターゼ	72
皮脂腺	11	デタノールアミン	70
ヒヤシス	28	侍従香	7
芳香アムモニア	204	人工麝香	48
芳香錠	210	人工ジヤスミン油	50
芳香花精	196	人工香料	23, 38
芳香蠟燭	1	次硝酸蒼鉛	177
芳香醋	203		
芳香燈油	1		

蒸餾法	24	カオリン	105
重炭酸加里	111	カブリン酸	52
重炭酸曹達(重曹)	111	カブリリン酸	52
K		伽羅油	170
嗅き香水	203	クワリン	84, 133
過硼酸ソーダ	113, 185	カリ石鹼	124
海龜油	58	花蠟	207
海綿法	24	カルダモン	190
海綿白粉	154	カルミン	98
海草末	85	カリウム明礬	113
海水用石鹼	123	顆粒層	10
果實精	77	過酸化硼砂	113, 185
カ、オ脂	59	過酸化カルシウム	185
花香ポマード	25	過酸化マグネシウム	185
花香脂	196	過酸化水素水	114
花香油	25	花精	25
覺醒素	96	苛性加里	109
角質	13	苛性曹達	108
角層	10, 12	過脂肪石鹼	124
髮洗粉	162	檀如樹	174
カンファー	28, 45	固棟白粉	153
汗孔	11, 12	蚊とり線香	213
甘扁桃實	83	滑石	105
汗腺	11, 12	カゼイン	81
甘素	68	毛穴	11, 13
カンタリヂン	74	桂皮油	29
カンタリス丁幾	74	輕質炭酸石灰	106
寒天	85	硅藻土	184
		懸濁	135

- 鹹化 119
 化粧醋 203
 化粧水 14, 69, 130
 化粧石鹼 118
 化粧用マツド 128
 ケトン 45
 挥發保留剤 75
 機械練 121
 君影草 27
 起毛筋 11, 13
 キナ樹 91
 キニーネ 91
 金合歡 30
 金屬性染毛劑 175
 生白粉 6, 152
 基底層 10
 キラヤ皮 188
 開香(カウアハセ) 2
 鑄物性煉香油 169
 鑄物性油脂 62
 香粉 208
 香錠 190
 香階 23
 固形頬紅 156, 158
 固形芳香品 210
 固形薰香 212
 固形煉香油 170
 固形パラフィン 63
 固形シャンプー 162
- 固体爪磨 159
 香言葉 3
 硬化油 65
 恒久白 104
 小麥粉 80
 粉齒磨 184
 粉白粉 148
 コンパクト 150
 コンスターーチ 79
 コプラ 52
 コレスティン 51, 93
 コロンウォーター 200
 コールドクリーム 139, 141
 香料 21
 香精 196
 香晶 211
 硬質石鹼 118
 香水 73, 191
 香水の保存法 197
 香水の使用法 197
 コスメチック 170
 固體芳香品 206
 香油 15
 枸櫞酸 89
 苦扁桃 32
 クインスシード 84
 クマリン 48
 薫香 212
 薫香紙 212

- クレンジングクリーム 127, 143
 クリーム 14, 69, 138
 くろもじ(鉤樟) 29
 黒文字 29
 黒砂糖 78, 130
 くるみの殻 178
 くせ直し 84, 172
 くすのき(樟樹) 28
 桑の根 178
 きやら 33
 杏仁實 83
 杏仁油 55
 薑黃 193
 京おしろい 5
 胡瓜水 84, 133
 吸收法 22
- M**
- マツド(粘土) 128
 抹香 212
 抹香鯨油 61
 豆粉 82
 マルメロ 84, 133
 マルセイユ石鹼 54, 119
 マルセル石鹼 54
 睫毛用コスメチック 158
 眉つぶし 154
 眉墨 158
 眉引き 4
- 眉作り 158
 迷迭香 36
 綿實油 56
 メントール 35, 41
 メタコレステリン 93
 メトール 179
 ミリスチン酸 51
 ミルク 81
 蜜蠟 60
 水紅 156
 水齒磨 188
 水白粉 69, 151
 水石鹼 124
 毛髮 11, 161
 木蠟 59
 木タール 92
 毛囊 11
 モノアミドフェニールアミン 180
 モノエタノールアミン 70
 毛生液 168
 無鉛白粉 100
 ムゲ(Muguet) 27
 無水硅酸 108
 無水油性クリーム 143
 ムスク 37
 ムスクアンブレット 49
 ムスクバウル 49
 ムスクケトン 49
 ムスクキシロール 49

- | | |
|--------------|----------|
| 無油性クリーム | 145 |
| 無油性煉紅 | 156 |
| 無油性頭髮香水 | 166 |
| 明礬 | 113 |
|
N | |
| 内分泌 | 97 |
| ナフタリン | 92 |
| 軟質石鹼 | 118 |
| ネイルホワイト | 160 |
| ネイルクリーム | 159 |
| ネイルオイル(爪磨油) | 159 |
| 煉香 | 207 |
| 煉齒磨 | 186 |
| 煉香油 | 169 |
| 煉白粉 | 69, 151 |
| ネロリー(橙花油) | 32 |
| 二番素地 | 121 |
| 匂袋 | 2, 208 |
| 匂紙 | 210 |
| 香の階調 | 22 |
| 匂ひの組立法 | 193 |
| にはひすみれ | 34 |
| 香天竺葵 | 30 |
| 二酸化チタニウム | 103 |
| 二層の油性頭髮香水 | 165 |
| 糠 | 125 |
| 乳化状態 | 135, 136 |
| 乳化剤 | 137 |
|
O | |
| オーペピン | 44 |
| オードキニン | 166 |
| オードキニーネ | 91 |
| オードコロン | 4, 201 |
| お歯黒 | 4 |
| オイケノール | 46 |
| オイセリン | 71 |
| オキシコレステリン | 51, 93 |
| オキシ脂肪酸 | 56 |
| オボンナツクス | 34 |
| オレンヂ(橙) | 32 |
| オレイン酸 | 51, 65 |
| オレイルアルコール | 51, 94 |
| オリーブ油 | 53 |
| オリス根末 | 184, 185 |
| 白粉 | 4, 5 |
| 白粉クリーム | 147 |
|
P | |
| Palm oil | 52 |
| バーム油 | 52 |
| パラフェニーレンデアミン | 99 |
| バルマローズ | 26 |
| バルミチン酸 | 51 |

- | | |
|-----------------|--------------|
| ばつちり | 6 |
| パツチニリー | 35 |
| Peanut oil | 55 |
| Peau d' espagne | 210 |
| ペクチン | 84 |
| ペパー・ミント | 35 |
| ペルーバルサム | 30 |
| ピロガロール | 176 |
| ボルトガルウォーター | 200 |
| Pot pourri jar | 211 |
| プライムミツクス | 57 |
| プロビタミン | 96 |
| プロビールアルコール | 193 |
| プロテギン | 71 |
|
R | |
| ラベンダー | 35 |
| ラベンダー香粉 | 209 |
| ラベンダーウオーター | 200 |
| ラード | 57 |
| ライススター・チ | 79 |
| 落花生油 | 55 |
| ラクトン | 48 |
| 蘭奢待 | 33 |
| 卵黄 | 80 |
| ラノリン | 61, 93 |
| 卵白 | 80 |
| 卵巣滤胞ホルモン | 97 |
| ラタニー | 193 |
| ラウリン酸 | 51 |
| 靈猫香 | 37 |
| 靈猫香丁幾 | 76 |
| レー・キ | 99 |
| レモン | 32 |
| レモングラス | 26 |
| レモンデュース | 134 |
| レング | 179 |
| レシチン | 80 |
| レゾルシン | 90 |
| リチノール酸 | 56 |
| リナロエ | 29 |
| リナロール | 40 |
| リノレン酸 | 65 |
| リノール酸 | 51, 54, 56 |
| 磷酸曹達 | 111 |
| リラス | 36 |
| リトホン | 104 |
| 蠟 | 51 |
| ローリングマツサージクリーム | 127 |
| ローション | 73, 191, 200 |
| ローズ | 31 |
| ローズマリー | 36 |
| ローズウォーター | 200 |
| ルーデスチック | 156, 157 |
| ルテイン | 81 |
| 菱形芳香 | 210 |
| 龍涎香 | 37 |
| 龍涎香丁幾 | 75 |

- 流动パラフィン 64
 硫化バリウム 115, 181
 硫化カルシウム 181
 硫化曹達 115
 硫化ストロンチウム 115, 181
 龍腦 42
 硫酸バリウム 104
 硫酸カルシウム 108
 硫酸キニーネ 91
 硫酸鐵 177
- S**
- サッセー(Sachet) 2, 208
 サフラン 193
 サツカリン 92, 189
 サツカラーズ 78
 醋酸アミール 77
 醋酸ベンデール 47
 醋酸ボルネオール 47
 醋酸ゲラニオール 47
 醋酸リナロール 46
 酸化亞鉛 102
 サンタロール 42
 サンタル 33
 サボニン 188
 サラダ油 53
 晒木蠟 60
 サリチール酸 88
 サリチール酸アミールエスター 48
- サリチール酸メチールエスター 47
 山茶花油 54
 セチールアルコール 51, 94
 石蠟 63
 石鹼 8, 14, 118, 162
 石炭酸 88
 洗滌料 117
 洗滌用クリーム 126
 染毛剤 174
 洗髮液 163
 洗灌曹達 110
 セレシン 63
 接觸反應 65
 シヤポン 8
 しやうがの皮 178
 觸媒 67
 硝酸銀 176
 蔗糖 78
 酒精 71
 酒精釀酵 72
 仕上煮 121
 仕上鹽析 121
 シヴェット 37
 刺戟素 96
 シクラメン 36
 シンナミツクアルデハイド(桂アルデハイド) 43
 シンナミツクアルコール(桂アルコール) 41

- 真皮 10, 12
 浸出法 25
 脂漏性脱毛症 11
 シトラール 42
 シトロネラ 27
 シトロネロール 40
 シトロネラール 42
 曹達灰 110
 素馨 36
 水中油エマルション 136
 水仙 26
 スイートピー(香豌豆) 29
 スカトール 50
 スキントニツク 131, 132
 スメーリングソルト 204
 スルフォ石炭酸亞鉛 89
 スアテリン酸 51, 66, 67
 ステアリン酸亞鉛 69
 ステアリン酸マグネシウム 69
 ステアリン酸モノグライコール 69
 ステアリン酸モノクリセライド 69
 ステアロプロテン 31
 鈴蘭 27
 植物性香料 23
 植物性煉香油 169
 植物性天然香料 26
 檀脑 28, 45
 檀脑コールドクリーム 140
 檀脑クリーム 144
- 樟腦精 74
 檀脑丁幾 74
 酒石酸 90
- T**
- Tallow 57
 炭麻 107
 谷間の姫百合 27
 タンニン酸 177
 炭酸アムモニウム 206
 炭酸加里 111
 炭酸カルシウム 106
 炭酸マグネシウム 107
 炭酸曹達 110
 單層の油性頭髮香水 165
 タルク 105
 タルクパウダー 105, 150
 タールシャンプー 92
 タールシャンプーリキッド 163
 テギン 69
 てんぐさ 85
 貼香 1
 天然香料 23
 テルピネオール 41
 頭髮香水 15, 74, 164
 頭髮油 168
 トイレットウォーター 191, 200
 床まき香水 191
 透明石鹼 123

止木のかをり	2
トンカ豆	30, 48
トンカ豆丁幾	77
豚脂	57
トラガントゴム	85
トリュタノールアミン	70
鳥肌	11
トリニトロブチールキシロール	49
トリニトロブチールトルオール	49
とろゝかつら	84
ところてんぐさ	85
トルーバルサム	30
冬綠	34
とうの土	154
椿油	54
ツベローズ	26
爪	10
爪紅	160
爪磨エナメル	160
爪磨クリーム	159, 163

U

茴香	33
浮石鹼	123
ウインタークリーン	34

W

梓練	121
ワセリン	64

Y

焼明礬	114
薬用石鹼末	70
椰子油	52
羊毛脂	61, 93
ヨノーン	45
羊脂	53
ユグノール	46
有棘層	10
百合	27
油中水エマルション	136
油性化粧水	135
油性煉紅	156
油性白粉	153
油性頭髮香水	164

Z

ザロール	189
ゼラチン	86

香粧品化學

昭和11年4月15日印刷

昭和11年4月20日發行

著者

伊與田光男

發行者

倉橋藤治郎

東京市神田區旅籠町三ノ四

發行所

工業圖書株式會社

東京市神田區旅籠町三ノ四


電話下谷 0283, 4817番

振替東京 61717番

印刷
共同印刷株式會社
(東京市小石川區久堅町一〇八)

定價 2 圓

11388
11388
11388



706

706-6



1200501583502